

# 特集

## 「ICT活用授業を通じた国際連携」

### 特集にあたって

青木久美子

メディア教育研究編集委員

高等教育市場のグローバル化が進み、日本の大学もグローバルな視野に立って戦略的に大学の国際化を推進していかなければならない時代になってきています。国際的な場では、世界貿易機構（WTO）のサービスの貿易に関する一般協定（GATS）において、高等教育もサービス貿易の枠組みの対象とみなされ、その賛否が論じられています。

サービス貿易としての高等教育はGATSの枠組みの中で、4種類の形態を持ちます。第一の形態が、「越境取引」です。これは、高等教育に当てはめると、人的移動なくして行われる国境を越えた教育、要するに、ICT等を活用して行われる国際遠隔教育がこれにあたります。第二の形態が、「国外消費」で、これは学生の海外留学をさします。第三の形態は、「商業拠点」で、高等教育では、海外分校等、海外に拠点を置いて教育サービスを提供することを言います。第四の形態は、「人の移動」で、これは教師等が海外に出向いて教育サービスを提供することをさします。

こういった国境を越えた高等教育サービスの提供を考えると、やはり、戦略的に必然性を持つてくるのが、国際連携です。海外に進出するにあたっては、やはり、進出先の事情が良くわかっている対象国の大学と提携を

したほうが、自ら全てを暗中模索で行うよりも、よっぽど効率が良いといえます。

大学における国際連携の形態としては、典型的なものに、従来の海外協定校制度が挙げられます。海外協定校制度のほとんどが交換留学生といった学生の人的移動を目的とするものですが、近年にあたっては留学生の交換だけにとどまらず、ICTを活用した教育交流等も幾つかの大学で試みられてきています。

現在試みられているICT活用授業を通じた国際連携において、GATS枠組みの第一形態の対象となるようなサービス貿易の意味合いを含むものはまだまだ見られませんが、様々な国際連携による知見を蓄積していくことによって、日本の大学もグローバルな高等教育市場に進出できるような国際競争力を身に付けていくことができるものと思っております。

今回の特集では、こういったICTを活用した国際連携教育の先駆的事例を6大学から紹介していただいております、その形態もいろいろであることがお分かりいただけると思います。

最後になりますが、本特集の発行にあたり、ご多忙にもかかわらず、ご執筆いただいた著者の方々に心から感謝いたします。